

第3部：持続可能な未来のための科学技術のイノベーション

共同司会：エコール・ポリテクニク（フランス）、大阪大学（日本）

主催：ノースウェスタン大学（米国）、U7+学生リーダー委員会

イベント概要：ヴァレリア・ディミトロヴァ（オタワ大学、学生）

シリーズの最後を飾る第3回目の「U7+世代間ラウンドテーブル」では、9カ国の10以上の大学から学生、教員、スタッフがオンラインで集まり、[持続可能な未来のための科学技術イノベーション](#)について議論しました。このラウンドテーブルは、エコール・ポリテクニクと大阪大学が共同で進行役を務め、ノースウェスタン大学とU7+学生委員会が主催しました。

U7+アライアンスは、世界の大学（40校以上）のネットワークで、2019年にパリで初めて学長が集まり、昨年もオンラインで開催されました。U7+の世代間交流ラウンドテーブルを3回シリーズで開催するというアイデアは、昨年の[U7+ 2020 世界学生フォーラム](#)に参加したU7+内の学生リーダーたちが考えたものです。この案は、2020年11月に開催されたU7+サミットで大学の学長たちから承認を得ました。

U7+世代間ラウンドテーブルでは、まず、共同司会をする大学の教員と学生の一般的な視点からのプレゼンテーションが行われました。発表者の一人であるシャヤン・カーン氏は、エコール・ポリテクニクの卒業生であり、U7+学生リーダー委員会のメンバーでもあります。「私にとっての出発点は学生です。学生はすべてを学ぶことはできませんし、学んだことを実際に応用することへ100%の準備ができているわけではありませんが、そのために私たちができることがあるかもしれません」と語った。

その後、参加者全員が4~6人の小グループに分かれ、U7+の学生リーダーの司会でディスカッションを行いました。最後に、参加者全員が集まって、それぞれのスモールディスカッションのまとめを発表しました。ここでは、第3回目の世代間ラウンドテーブルで得られたヒントや提言をご紹介します。

- **私たちに、気候変動について一般の人々を教育し、情報を提供する責任があります。** ティエリー・レイナ教授の発表では、地球温暖化に対して無関心であったり、不信感を持つ一般の人々の態度を変えていかなければならないという、私たちの責任の大きさが述べられました。学生たち

は知識を応用することについて、「科学に関わる人はエリートであることが多い」と述べています。では、どうすればその結果を一般の人々にうまく伝えることができるのでしょうか？

- **メディアには、科学的な価値や議論をするための役割があります。**特にソーシャルメディアは、一般の人々と情報を共有する上で重要な役割を担っています。学生たちは、「多くの人が科学にふさわしい大きな出番を与えず、科学よりも政治的な問題を重視している」という点で一致しました。
- **技術だけではなく、その技術が機能するシステムこそが、違いを生むのです。**シャヤン・カーン氏のプレゼンテーションでは、私たちはあまりにも速いペースで動いているため、テクノロジーがもたらす社会的な影響を忘れがちであると述べています。参加者は、科学技術の社会的影響をいくつかの側面から考察しました。(a) 労働力の変化（例：電化製品の増加-それは燃料のためか、他のもののためか）。(b) 労働問題（例：リチウム採掘）(c) 価値観と労働倫理（例：ネット・ゼロ・ウェイストの社会的価値）(d) 誰が、何が、気候変動を引き起こしているのか（例：全員が、あるいはむしろ最大手企業が）。
- **持続可能な経済への移行には、新しい技術だけではなく、人々のライフスタイルの変革も必要です。**森田敦郎教授の発表では、インフラは社会生活の中に深く入り込んでいることを強調しました。その結果、これまでの多くのインフラは、エネルギーを大量に消費するライフスタイルを形成してきました。大量消費に代わるものとして、世界各地の [FABlabs](#) のグローバルコミュニティが主導する FAB シティプロジェクトがあります。これは、市民が運営する小さな工場や工房で構成される、地域の自給自足の実験です。そこから学生たちは、私有財産や個人主義に関する既存の法律に疑問を投げかけ、「個人主義になるように社会で法律が設定されていたら、将来的にとっても持続可能な社会になることはできないのではないか」と述べました。
- **技術やインフラのコストも考えなければなりません。**参加者は、コストが貧困国や経済的に恵まれていない国に転嫁されがちであることを反省しました。「先進国の私たちだけでなく、第三世界の国々で私たちが果たすべき役割についても考える必要があります。大きな家だけではなく、基本的なインフラも必要だということを目の当たりにしました」と学生たちは語りました。
- **地域の専門性や特徴に応じて、多様な地域生産、自治、地域利用を促進することを推奨します。**エミール・サンピエールさんは、日本の北海道での研究を発表しました。牛乳の生産地として知られる北海道では、地域のエネルギー需要をバイオガスの能力に頼っていました。不思議なことに、農家の人たちと話をしているうちに、バイオガスの登場は、地元の発展を願って始まったのではなく、2000年代に耐え難いほどの汚染をもたらした拡大農場からの廃棄物処理がきっかけだったことがわかったのです。学生たちはそれを理解した上で、「農業の実践と、それが農業保険やケニアでの気候スマートアグリゲーションの実践など、より広いシステムにどのように適合出来るか」についてさらに考えました。

- **大学は、学生が学際的なつながりを持てるような環境を整える必要があります。**学生は自分の専門分野に特化する傾向がありますが、これでは専門分野間のコミュニケーションが不足してしまいます。レイナ教授が言うところの「T字型人材」がもっと必要なのです。特定の分野に非常に深い知識を持ち、実際に関連する分野とのつながりを持つことができる人材です。
- **人々は生涯学習にもっと取り組むべきです。実際、既存の情報は常に更新され、より良いものに改善されています。**学生たちは「お互いに学び合うことができる」という点で一致しました。

この3部構成のシリーズは、主催者と、世界のさまざまな大学の意見を伝えるために参加してくれた学生、教職員の皆さんのおかげでとても有意義なものとなりました。

